

先端人

体に優しい手術極める

手術室に置かれた装置から伸びる複数の「手」。患者の腹部に1〜4センチの小さな穴を開け、カメラや手術器具の付いた「手」を体内に入れる。ロボット「ダヴィンチ」を使う執刀医は、離れた場所で3D画像を見ながら操作する。

呼吸器外科医として、ロボット手術や内視鏡手術など、患者に負担の少ない低侵襲手術に取り組んできた。「神経や筋肉の損傷が少なく、患者にとって体に優しい手術を極めたい」

2009年、初期の肺がん患者のロボット手術を執刀した。背中から肋骨にかけて3センチほどメスを入れる「開胸手術」に比べると、傷は小さい。ロボットなら手の関節と同じように動く。トレーニングにより、1センチ以下の高精度な操作が必要な手術もできるという。患者は1週間で退院

低侵襲手術

藤田保健衛生大教授 須田 隆さん (50)



名古屋市生まれ。2017年から藤田保健衛生大呼吸器外科教授。学生時代の友人らと長野県内に、木の上の家「ツリーハウス」を建築中。10年かけてほぼ完成した。「そこで酒を飲むのが楽しみ」

し、元気に過ごしている。

患者は退院後も定期的な検査で通院が続く。「手術から再発無く5年経ち、「もう外来に来なくても大丈夫ですよ」と告げる時が一番うれしい」

父は整形外科医。自宅兼医院で、患者に簡単な手術をする父の姿を見て育った。「知らないうちに親の後を追っていた」

15年から、胸部の腫瘍に

対し、3センチ程度の穴を一つだけ開けて行う内視鏡手術「単孔式手術」も始めている。「外科の仕事は単純。『切って治す』。患者さんは治してもらいたいと思っ

て病院に来る。それを自分の手でやりたい」。自分の名が付くような新しい手術を開発するのが夢の一つだ。(月籠彩子)